第５回学校運営協議会

令和５年２月15日（水）２時30分

出席者

会長	妹尾　久雄
副会長	新井　利勝
コーディネーター	小野　修平
委員	鈴木　綾
委員	友田　弓子
委員	宮本　尚登（校長）
委員	矢﨑　慶　（副校長）
	海老塚京子（教員）
	小川　壮司（教員）
	宮﨑　孝平（教員）

市教育委員会事務局（社会教育課）

１　会長あいさつ

今年度最後となります。よろしくお願いします。

２　教育委員会あいさつ

１年間、ありがとうございました。西東京市は、来年度コミュニティ・スクールを増設予定です。また新たな取組が始まってくると思いますが、先行して実施していただいている明保中とけやき小の２校を参考にしながら、順次他の学校も取組を進めたいと思っていますので、お力添えいただけると助かります。よろしくお願いします。

３　校長より

〇令和５年度重点事項について

令和５年度学校経営方針は令和５年度第１回学校運営協議会で承認いただく予定である。

令和５年度は、「人から感謝される活動」「自然体験活動」「自分で考え、相手に伝える活動」「皆で体を動かす活動」を重視していく。学校運営協議会でも、本校の活動について議論や評価をしていただく際は、この視点でお願いしたい。

〇地域学校協働活動について

学校運営協議会と地域学校協働活動本部は、車の両輪に例えられていて、両方を

一体化して進めていくことが重要であると認識している。

学校運営協議会は、学校運営及び学校運営に必要な支援に関する協議をする場である。地域学校協働本部は、明保中はまだできていないが、各団体の横の連携を進める場であり学校を会場にしながら、本部という形で運営する。しかし、地域学校協働本部が単独で動いていくと、学校との関係ができなくなってしまうため、コーディネーターの方には、学校運営協議会の委員にもなっていただくという条件がある。学校運営協議会では地域の方の情報提供をしていただき、地域学校協働本部いわゆる学校応援団では、学校がやろうとしていることを話して、調整していただく。

学校運営協議会は地域学校協働本部ではない。また、学校が主体となってやっていくことに地域の各団体が入っていくのではなく、各団体はそれぞれ今までどおりの活動をしながら、横の繋がりをさらに強化しまとめて、地域の課題を共有するために本部の形式でやったらどうかという提案になっている。その部分に関しての確認をしないと方向性がおかしくなる。

委員：地域学校協働推進員が新しく増えると、格差が出てくると思うが、どのように方向づけしていくのか。

委員：あくまでも、各団体の活動を一からかみ合わせてということではなく、既存で行われている活動を中心にしつつ、参加者・協力者を増やすように注力しいくイメージであって、今の学校に資する活動をベースにしている。

委員：学校運営協議会の仕組みと地域学校協働本部の仕組みを繋ぐ役割があることを共通認識として話されたと思うが、まだ学校応援団のような仕組みができていないため動ける体制ではないので、そこを含めて学校運営協議会で、学校運営に限らず全体的なところも意見交換したい。一人では重たすぎるし、学校応援団の機能もしばらくは担っていかないと回らないのではないか。

委員：地域学校協働本部というのは、私の認識は、本部という場所があるのではなく、いわゆる会議体、それぞれの団体の代表が集まって定例的に会議を開くというものを本部と言えば良いのかと思うが、部屋を作ることなのか。

委員：部屋を作るということではないが、最終的に行き着くところはそこだと良い。

委員：全部の団体で何かをしてくださいということではない。それぞれ特色や得意なことがあると思うので、その場その場に応じた進め方があると思う。

委員：学校応援団が地域学校協働本部だということは最初からは聞いてなかった。学校そのものが求めているものに直結するものが学校応援団だと思っていた。地域学校協働活動推進員という方がそこの部分をコーディネートすると思っていた。

委員：コーディネーターが、学校のペンキ塗りのニーズがあるということをそれぞれ

の関係機関が集まる場で話してもらって、どこでやるか調整して進めるという考え方で良いのか。

委員：それでも良いし、関係団体に声をかけて、どこに所属していても手が上がる方で集まってやっても良い。

委員：育成会は知らないうちに地域学校協働本部にはいっていたというのが率直な意見である。地域学校協働本部の横の繋がりを作るのはコーディネーターだけでは無理だと思う。

委員：地域学校協働本部は、今の時点ではできていないという認識で良いか。横の会議が開かれた時に、これが本部ということになる。そこはみんなで知恵を出し合いながらやっていきたい。コーディネーターもお一人でなくても良い。学校としては、地域学校協働本部以外の話題を議論に出していかなければいけない。

委員：1回目のペンキ塗りは、誰も見ていない前提で市報にＱＲコードを載せてみたら、多くの申し込みがあり、新たな発見があった。卒業生や新たな地域の方を巻き込む機会として、ペンキ塗りや今後いろいろな取組を行う予定である。学校運営協議会と地域学校協働本部があってぜんぶを繋ぐのは人数がいても難しいし、会議体を作ると会議ばかり増えてしまうので良くない。いずれ学校の中に必要性が出てきたときに作るものであると思うが、できても結局このメンバーになってしまう。

委員：今は形としては、（校運営協議会と地域学校協働本部の）両方の話し合いをしているが、本来は別々で協力しあう関係なのかと思う。実際のところは、地域で活動している人間が基本的には学校運営協議会の委員をしている。同じようなメンバーになっているのは間違いないので、別の会を立ち上げるのはどうか。

委員：数年はこの形になるのではないか。しばらくは明保中で考えていくしかない。

委員：ほかの学校で入っている団体は、小学校では育成会、民生委員等学校に資する活動をしてくださっている方がベースであるため、2～3回会ったくらいの方ではメンバーに入れることはできないため、どこの学校もだいたい共通して皆さんの知った顔が集まるという傾向がある。これから設置する学校についても、知っている方が多い。そのため、会議後に情報共有している姿が見られる。

委員：学校評議員制度と違い、権限も増えて、方向性も掲げてやってくように変わったが、今の段階では学校運営協議会と地域学校協働本部を分けて行うことはまだできないのではないか。

校長：ところで、令和5年度の取組の1つとして、自然体験活動として、学校で飯盒さんを考えていて、新1年生は埼玉県の嵐山渓谷に行って飯盒炊さんをする。飯盒を購入したので、2 年生と 3 年生も校庭で飯盒炊さんをやりたい。飯盒は、運動や勉強の得意不得意は関係ないため、みんなで楽しくできると考え

ている。しかし、飯盒は購入したがかまどがない。

教員：かまどの代わりになるもので考えているのが一斗缶で、ある程度の数揃えたい。

教員：技術的な指導ができる方がいてくれるとありがたい。

委員：そういう活動を地域の方に手伝ってもらうのは可能である。時期はいつごろか。

校長：夏を避けたゴールデンウィーク前か来年 3 月に実施したい。給食をどうするかについても考えたい。

委員：小学校で 5，6 年生の保護者が作っていた。現在、調理実習はやっているのか。

校長：一時期やっていなかったが、今はやっている。

委員：経験値の少ない子が多いが、子どもたちが自分で作った方が楽しいし、美味しいと思う。

委員：ところで、東小の育成会として、防災的なことを中学生と一緒にできないかと思っている。起震車を呼んだり、煙体験や車いす体験もできたら良いと思っている。実体験に繋がることができると、育成会メンバーとして中学生とも関わりが持てる。災害用井戸の使い方やバケツリレーするなどの意見もあった。

委員：前回、スポーツの話が出ていたが、学校としては飯盒炊さんをやりたい。土曜日にイベント系をやりたいという話も考えたい。

委員：学校の授業の時間帯の中でやることと、外でやることといろいろあって良いと思う。

4　各委員からの報告

〇令和 5 年度第 1 弾の取組（レクリエーション）について

令和 4 年 10 月 15 日に行ったアイデア出しワークショップのまとめにあったスポーツ大会等の企画について、前回は春休み中の実施を目標にしていたが、新中 1 の生徒にとって、入学前にこの行事に参加した、してないで分かれると、人間関係で心配されることがあるいうことで、ゴールデンウィークが一番早い時期として妥当かと思う。卒業生や今まで関わった人中心にお声がけして企画を進めていきたい。

せっかく 1 年生中心にワークショップを行いまとめてもらったので、飯盒炊さんの時期とも調整して早めにやっていきたい。

〇令和 5 年度の方向性について

・生徒の主体的な参画

・協力者の確保

・情報発信

○具体的な取組案

・生徒や卒業生を中心とした交流イベントの企画
・北東部地域協力ネットワーク「ほくとネット（仮称)」への参画
・既存の団体や関係機関との情報交換
・連絡体制の構築

委員：飯盒炊さん、育成会の防災関係、それぞれを単独でやるより、これらをうまく一緒にできると良い。

委員：レクリエーションの一番の目的は中学生が主体的に企画・運営していく。

委員：飯盒炊さんを中学生主体にするのはどうか。

委員：元々は学校の授業時間帯以外で企画して卒業生や地域の方とやりたいというイメージだった。学校の授業の中で飯盒炊爨の活動で生徒が関わるのはもちろんだが、中学生はそれとは別のイメージをもっているのかなと思う。

委員：ワークショップでは、自由に意見を出していたが、実現するのかという不安も見えていた。お祭りをやりたいという意見もあったが大変さがわかっていない。育成会で来年度は冬まつりを再開したいと思っている。そこに中学生の方にボランティアで入ってもらって、中学生のお店を開いてもらったらどうか考えている。そこから、中学でもやってみようとなったら、大人の関わり方が考えられると思う。やってみないと、どういうことが実現できるかわからない。

委員：ルールの決まっているスポーツ大会だと入り口として入りやすい。学校の中だけで必要とされたりしながら活動をやっていくことだけでは無理で、放課後や休みの日に一緒にやらないと難しい。

委員：既存の団体が主催した事業は行きたいと思っている中学生が行く。既存の団体ではないところの主催事業と子どものニーズが合って、今回の企画も行きたい人だけでよければそれで良い。子どもからの提案であれば誰も行かないということはないようなイベントになると思うが、人数が揃わなければいけない企画に、無理やり出させられるようなことは危惧している

委員：防災が一緒にできるのであれば良い。

委員：そういう感じの抱き合わせができればウィンウインの関係で良い。

委員：学校の授業の中で、全員が同じ日に、自分でご飯を作る体験経験と、防災の体験ができる場に育成会がどう関わるか考えていきたい。1年生がワークショップで考えていたことは、もう少しラフな形で放課後や土日にやれることだと思う。

委員：ペンキ塗りの時に中学生と話しながらやっていても、そのようなことがやりた

いと感じた。もっと生徒の声を聞かなければいけないと思って、ワークショップを行ったという経緯がある。まとめの作業の時にも、学校の中だけではない方との取組の企画もしてみたいという意見があった。

委員：球技大会が良いのではないか。

委員：運動得意不得意があって、楽しめる子と楽しめない子がいる。楽しめない子のために種目を用意するなどの配慮も必要である。

委員：全員参加でないイベントを企画したい子がいるわけだから、環境としては作っていくのが大切である。

委員：ニュースポーツはどうか。

委員：何をやるかは、企画の中で中学生が配慮をどうするか考えていくべきではないか。企画から手を出さないで見守っていきたい。また、行事の中での取組として、育成会に協力したいただきながら、飯盒炊さんに取り組みたい。

委員：地域学校協働活動の方は、学校を核として地域をどう巻き込むかという議論をしていて、結局は同じことだがそれぞれが分離している。地域から攻めるか学校から攻めるかの違いで会が同じになるはずなのに、それぞれが動いているため、学校は今、コミュニティ・スクールの方で動いているから、矛盾が生じる。

委員：学校がそういう関係性で関わらないのを理解した上で、学校に協力をお願いすることは時期を見て相談させていただく。

結論としては、飯盒炊さんとレクリエーションの時期はいつになるか。

委員：飯盒炊さんは 4 月の可能性もある。

委員：4 月だと 5 月の総会で来年度の予定を正式に承認されるため、間に合わない。

委員：決定にはもう少し時間がかかるため、4 月ならそれぞれでやって、来年 3 月だったら、検討していきたい。防災は一緒にやらせていただきたい。

委員：飯盒炊さんの日程が 4 月になれば、レクリエーションの日程を遅らせるようにする。3 月になれば、育成会とのコラボも可能になるため、考えていきたい。

5　学校評価

副校長：一斉配信メールで行った保護者アンケートの結果と教員アンケートの結果を参考にして、学校関係者評価をお願いしたい。地域学校協働活動に関しての設問は、保護者の方は子どもの姿を直接見ていて評価が高いのに対して、教員の評価はやってもらっているという意識もあり、認識にずれが出ていると感じた。この部分をすり合わせることが来年度の課題になる。

委員：保護者アンケートを見ると、設問の内容によっては、「思わない」・「わからない」という回答が十数人、二十数人いるが、その数字の重みを学校はどう捉えているのか。その点についてアドバイスいただいて、アンンケートの参考に

させていただきたい。

委員：肯定的な回答が 80%を切っているのが課題だと思っている。90%を超えていれば、皆さんからご理解をいただいていると思っている。「わからない」という回答は、実際にわからないのだと思う。支援をしている保護者の方からは、比較的肯定的な回答をいただいている傾向が強い。該当生徒の保護者が高い傾向があるため、概ねこれで良いかと思う。

委員：「わからないと」回答した保護者は授業参観を見ていないなどの理由で回答しているのではないか。一斉メールのアンケートにご回答いただいた 6 割の方は基本的には学校に協力しようと思っている方だと思う。4 割の方はお忙しいなどの理由で回答できないのかもしれない。本当はそのところの意見が知りたいのかなと思う。本気のかくれんぼに参加してくださった保護者が多かったのは、学校に関心があるからだと思った。

委員：基本的にはご理解いただいている保護者が多い。教師と保護者の会ともうまく調整していただいている。

委員：設問 1 ～13 までは、ご自分のお子さん対象か、明保中の生徒全体が対象か。

校長：ご自身のお子さんの様子を見て、学校全体を想像して回答していただくようお願いした。

委員：見えない部分もあるから、ご自分のお子さんを見て回答していただいたということで良いか。

委員：そのとおりである。

※ 次回　令和 5 年 5 月 17 日（水）　14：30～